令和８年度第１回自立支援協議会テーマ別部会
教育と福祉の相互理解について　議事要旨

１．開催日時　　令和８年９月３日（木）　10 時～11 時 30 分

２．開催場所　　まちづくり活動プラザ　１階会議室

３．出 席 者　　（委員）＊団体名のみ記載
認定 NPO 法人発達わんぱく会、（福）佑啓会、（福）千楽、NPO 法人親子に寄り添う連携支援プロジェクト、千葉県立市川特別支援学校、浦安市教育センター、指導課、障がい事業課
（事務局）浦安市基幹相談支援センター

４．議事次第
　１．開会
　２．議題
　　（１）自己紹介
　　（２）部会開催にあたって　～事務局より～
　　　自立支援協議会、テーマ別部会についての説明
　　（３）昨年度のテーマ別部会「教育と福祉の連携」の活動経過、内容等の説明と共有
　　（４）令和８年度の本部会の方向性　～事務局より～
　　　目指す部会活動、目標設定、具体的な取組みと成果イメージ（案）の説明
　　（５）令和８年度の本部会の開催日程
　３．閉会

５．配布資料
・次第
・委員名簿
・令和７年度テーマ別部会「教育と福祉の連携」の活動報告書

６．議事要旨
１）自己紹介
　各委員より、氏名、所属組織や自身が従事している業務内容等について紹介

２）部会開催にあたって　～事務局より～
　事務局より、次第に沿って自立支援協議会、テーマ別部会についての概略説明を行った。

３）昨年度のテーマ別部会「教育と福祉の連携」の活動経過、内容等の説明と共有
　事務局より、配布資料昨年度のテーマ別部会「教育と福祉の連携」活動報告書を用いて、昨年度の活動内容について概略説明を行った。
４）令和８年度の本部会の方向性について

事務局より以下の通り次第に沿って説明を行った。

〔目指す部会活動イメージ〕

福祉と教育の相互理解を促進するため（本部会の目的)、半年間で成果が見込める協働体験をこの部会で積み重ね半年間（計６回）の部会で出来る事に取り組む。

〔目標設定イメージ〕

本部会の場を福祉と教育関係者が一つのことに一緒に取り組む協働の場として設定し、目的を達成するための道しるべとなる目標を設定する。

〔具体的な協働する取組みと成果イメージ案〕

事務局より、２つの「案」を説明。

案１　目標：福祉と教育の現場がお互いの実情と考えを理解する機会（場）をつくる
→取組み：合同研修会や意見交換会の開催

案２　目標：福祉関係者と教育関係者が互いにコンタクトするためのツールの具体化
→取組み：様式の作成（例：学校からの相談連絡カード）

事務局からの説明を受けて、以下、委員から述べられた意見や論点：

- 教育関係者が福祉関係者とリアルにつながる機会が無いことから、お互いの考え方を知る必要性を感じて勉強会の開催を行った。事例の共有や検討を通して、学校職員、福祉関係者が一緒に考える。福祉関係者にとって、学校の中に入ることはハードルが高い。学校で共同研修会を行うことで、福祉関係者が学校に来る機会になり、学校で研修会を行う意義があると感じている。
- 市内の学校と福祉の連携は必要だと思う。夏季休暇中に行う先生方の希望研修では、そらいろを講師として招いて開催しているものもある。指導課が主催でできることもある。
- 先生方（経験が１年から３年）は共同研修を研修単位としてカウントできるように設定する（位置づける）と参加率は上がる。
- 事例検討をすると双方の視点、アプローチの違いが明らかになる。視点の違いを知ったり、研修会で互いの文化を知ることは大切だと思う。
- 基幹が主催する研修会に学校の先生が参加された際、浦教研の話があった。そのような場を活用することも一案か。

⇒浦教研は、先生全員の研修という形ではない。部会が２０くらいあり、自分で学びたい部会に入るものである。特別支援についての部会もあるので、その部会の研修では可能かもしれない。

- 福祉と教育が一緒に研修を行う方法としては、希望研修であれば集まりやすいのではないか。
- 指導方法についての研修がある。若手が参加しており、ざっくばらんに現場の話をするのであればそのほうよいかもしれない。
- 特別支援教育に関わる先生方が参加できる形だと、繋がりが作りやすいように感じる。
- 研修会は今年度開催は難しいと思う。学校のスケジュールは４月にすでに決まっており、今年度新たに追加してもらうことは難しい。この部会でまとまったものを協議会で意見として伝えることを今年度の成果とし、研修は来年度に実施であれば可能だと思う。
- 自組織にて、親御さんがつながる入口は人それぞれであることから、つながり先の一覧を作成

した。先生方に福祉側の情報を可視化して、研修の際にお渡しするのはどうか。

- 教育関係者は、そもそも福祉関係者が日常的に用いている言葉が分からない。福祉の制度や仕組みを教育関係者に説明する必要があると感じる。共通理解を図るためのツールや情報が網羅されたマップなどを作成するとよいのではないか。
- 計画相談支援を行っていると感じることがある。通常級の先生は、お子さんが放課後等デイサービスに行っていると知っていても、そこで何をやっているかわかないことも多い。先生も困っている。学校から福祉に連絡して良いものなのか、どのようなことであれば連絡してもよいのかわからないし、その感覚は先生によっても違う。教育側も福祉側も一歩踏み出しやすくなるようなツールがあるとよい。
- 先生方はどう福祉につながれば良いのか、そもそも繋がってよいのかが分からない。福祉関係者は学校に電話をしてよいのかなど、互いに「わからない」ことがあるように感じることから、教育と福祉、どちらから見ても良いツールがあるとよい。
- 研修は取り組みやすいと感じた。研修に参加して「こうしてみよう」を持ち帰ることができるとよい。日頃の業務で、どのレベルで学校に連絡してよいのか迷う。直接、支援者が連絡するレベルなのか、保護者が連絡したほうがよいのか。連絡方法の混線を解消することができればよいのではないかと思う。
- 福祉から見ると、学校からの引継ぎ情報、アセスメント結果などの情報があればと常に感じる反面、個人情報の壁をどうするかが課題。教育の中に、子どもたちが感じる居場所感、所属感、孤独感へのケアという視点があればと感じている。
- 具体的なツールは、お互いの垣根が低くなってからの方がよい。（行政からの研修開催を考えると今期中の開催は難しく来季への提案になるとの説明を受けて）今年度に来年度の研修開催日程を具体的に決めるところまで到達できれば、この場で教育関係者と福祉関係者が一緒に決めることが出来た体験をすることで、相互理解に向けて、少し見えてくるものがあるのではないかと思った。
- 以前担任を持っていた時に学年を上がる時や、困り感が多い時に、関係機関が集まり、学校と福祉の役割分担や情報交換ができた。支援者が色々な情報を共有することはすごく大切だと思った。母自身の困りごともあったのでそこで相互理解できたのがよかった。
- 学校としてみれば、福祉に相談するレベルが判断できない。経験が浅い先生では、気になるけれども相談する必要があるか、すべきなのかがわからない。相談する際の物差し、フローチャートのたたき台をこの部会で作成して、次年度の研修会にて、そのたたき台を練り直し改善していくことはどうか。
- 支援については校内での検討を経て、外部の機関が相談先としてあがる。やはり、教育関係者に福祉はこういうものだと知ってもらうことが先になるのではないか。
- 先生たち自身が相談ニーズをまず自覚化するためのツールの作成という考え方はどうか。なんだかよくわからないけど気になっている先生方が整理するためのツール。教育的視点、福祉的視点を合わせてもったもの。
- お互いが何となく知っているという下地を作ることができれば、連絡がしやすいのではないか。共通認識を作るための手助けとなるもの。

上記のような意見交換があり、次回の部会に向けて、教育関係者、福祉関係者、双方が知りたい

こと（不足している情報）を出し合って、相互理解を図るためにどのようなツールが必要か検討することを確認して閉会。